防災・減災の輪

かがわ自主ぼう連絡協議会
会報 第 83 号(2014. 2. 1)
事務局川西地区自主防災会

讃岐の風土、歴史に育まれた災害文化を発掘しませんか！

香川大学工学部・危機管理研究センター
長谷川 修一

日本は、いま大自然の脅威とグローバリズムの脅威とにさられています。大自然の脅威は、プレート境界の変動帯の日本列島に住む日本人の宿命です。太平洋沿岸地帯は、繰り返し海溝型巨大地震の地震と津波、時には大規模火山噴火の洗礼を受けてきました。

またグローバリズムは、相手の国の事情を顧みず、一方的に自由貿易や構造改革や規制緩和を求めます。まるで今だけ、自分だけ、金だけが大事な、力と資本が支配する植民地主義のようです。グローバリズムの洗礼を受けた世界各地で地場産業そして生活そのものが破壊され、地域の文化と伝統が廃れてきています。その結果、社会が災害に対して脆弱になります。

クローバリズムによって勝ち組と負け組みに分断された日本を南海トラフ巨大地震、首都直下地震、大規模火山噴火(富士山等)などの巨大自然災害が待ち構えています。同じような自然災害として、1703 年元禄地震、1707 年宝永地震、1707 年富士山の宝永噴火がありますが、その当時は鎖国のため大きな動乱はなく、幕府と諸藩と民が助け合って、難局をのりきって、新田開発の高度成長から地場と産業と文化を活かした安定成長へとうまく転換したと、歴史家の歴史家の磯田道史先生は評価しています。

しかし、江戸時代と現在では土地利用が全く異なっていまし。しかし今や、1703 年元禄地震と 1707 年宝永地震の津波が襲った新田と干潟は日本の産業の中枢である太平洋ベルト地帯に変貌し、その地上と海底には大量の有害物質や危険物質が蓄積されています。この有毒物質が、ひとたび黒い津波となって沿岸部の低地を襲うと、津波浸水域が土壌汚染地区になる恐れがあります。そうなったら、今だけ、自分だけ、金だけが大事なグローバル資本はどうするでしょうか？

昨年末に首都直下型地震の被害想定が公表されましが、想定された被害の小ささに驚きました。1855 年の安政江戸型地震の死者は大きく見積もって約 1 万人、1923 年関東大震災の死者は約 10 万人ですので、3000 万人を越える首都圏の死者が最大で 2.3 万人は小さすぎるのではないでしょうか(私は 100 万人を覚悟していました)。

また、首都直下地震が発生すると、地方から物心両面の仕送りが止まり、東京では万事休すとなる恐れがあります。鴨長明も平安末期の災害後における京の困窮を方丈記に記しています。

「京のならひ、何わざにつけても、源は、田舎をこそ頼めるに、たとえ上るものなければ、さのみやは操もつくりあえん。（京都の経済というものは、いつも、何にもよらず、根源は、地方に依存しているのに、まったく送り込まれるものがないものだから、こうなると、とても平常のような体裁をつくろてなんかいられやしない。）（簗瀬一雄訳注、角川ソフィア文庫）」

東京一極へ集中する人とマネーの流れを少しでもくい止めて、田舎に向けるには、地方にマネーとは別の価値を見出し、地産地消の助け合いの経済を復活させる必要があります。これは、巨大災害時のレジリエンス（回復力）にもつながります。ソ連崩壊の際に旧ソ連の住民が食いつなぐことができたのは、食糧の備蓄と家庭菜園（ダーチャ）だといいます。この教訓を考えると、これからの農業は国際競争のために大規模化でなく、戦争や国際戦略による油断や自然災害などに対する備えになる兼業化、小規模化、地産地消で、休耕田を活用した半農半Ｘ（仕事）が災害列島にふさわしいのではないでしょうか。そして、1ヶ月の備蓄と家庭菜園があれば、巨大災害になっても、油断が引き起こされてあわてずに、分かち合いと助け合いで対処することができます。

災害列島で暮らすには、競争ではなく、助け合い、分かち合いの災害文化が基本です。磯田先生によれば、この災害文化はどうも江戸時代に出来上がったようです。また、東日本大震災では、縄文時代の遺跡が津波による被害を受けなかったことも注目されました。津波で大きな被害を受けた東松島市里浜貝塚では、縄文人が何千年も標高約 50m の高台に暮らしていました。そういえば、観音寺市沖の伊吹島では、鮮度が命のいりこ工場は海際ですが、住宅は高台にあります。家と職場を一度に失わない知恵だと誇ることができます。

祭りの盛んな地域は、地域のつながりが強く、災害に強いと言われています。祭りを運営すること自体が、災害時の訓練になります。また、災害の伝承のための始まった祭りもあります。丸亀市土器町の田潮神社には、神社の由来を記録した石碑があります。

「南北朝時代の貞治元（1362）年、南朝方の細川清氏と北朝方の細川頼之が従兄弟の間柄でありながら争うことに。夜襲を受けた頼之は出陣の際に同八幡宮に勝利を祈願、すると海の潮が満ちて田野を没し、敵の追撃を阻んだ。これをきっかけに田潮神社と名付けられ、故事にあやかり水浴び神輿が始まったという。」

今後、調査によって確認する必要がありますが、「海の潮が満ちて田野を没し、敵の追撃を阻んだ」のは正平地震（1361.6.24, M8.5？）による津波の可能性があります。もしそうなら、香川県が昨年公表した南海トラフ最大級の津波浸水予測図は、過去にあった最大級の津波の浸水域を再現したことになります。

田潮神社以外にも、香川県にはいろいろな災害の伝承が残されていると思います。讃岐の風土、歴史に育まれた災害文化を発掘し、地域防災に活用しませんか！

実は、グローバリズムが嫌がるのは、国や地域固有の文化なのです。地域の文化と伝統を地域で協力して守ることは、防災力の向上だけでなく、グローバリズムへの抵抗勢力にもなるのです。

【お知らせ】

お問い合せ　香川大学危機管理研究センター

平成25年度自主防災組織リーダー研修を振り返って

香川県危機管理総局危機管理課

去る１月２６日（日）に、香川県消防学校において「平成２５年度自主防災組織リーダー研修」を開催しました。今年度は、日曜日ということもあり、県内各地の自主防災組織のリーダー等約７０名が受講し、香川大学危機管理研究センターの磯打千雅子特命准教授による基調講演、講演活動などで全国を飛び回っている「ぼうぼうネット」（山口県）の山﨑隆弘事務局長、さらには岩崎会長をはじめとするかがわ自主ぼうの皆様による状況付与型図上訓練そして意見交換会という盛り沢山のメニューとなりました。

まず、「地域防災リーダーに必要な資質と素養」との演題で磯打先生の講演が行われ、災害時に組織や地域が生き残るために必要な事項、そして地域は災害時にどのような組織で立ち向かうべきか、地域防災リーダーに求められる資質や素養はどのようなものかなどについて、興味深いお話をいただきました。

次に、「災・その時に動ける人づくり」～いやいやしぶしぶの防災活動を楽しくする方法～との演題で山﨑事務局長の講演が行われ、昨年夏に大きな被害を受けた「山口島根豪雨災害」における島根県津和野町の事例さらには講師の地元である山口県防府市における教訓などをふんだんに使った講義、さらにはプチ（？）ワークショップとして、参加者が防災活動を楽しくするために必要な事項を自由に挙げていただくなど、１時間という予定の時間をを濃密に過ごすこととなりました。

午後は、かがわ自主ぼう連絡協議会による状況付与型訓練が行われ、岩崎会長をコーディネーターに、また有志の方々をインストラクターにお迎えして、班別討議そして発表を行いました。短い時間で参加者の皆様も見解をまとめ、発表されていましたが、岩崎会長からは、「災害時にはいろいろなことが発生する。もうすこしいろいろなことに思いを巡らすことが必要」との苦言をいただく一幕もありました。

最後になりましたが、今回の研修の講師の先生方をはじめ、サポートいただいた方々、そして研修にご参加の皆様に御礼申し上げます。ぜひ、今回の成果を地域に持ち帰り活かしていただければと思います。

事務局だより

平成26年2月

かがわ自主ぼうの事務局を担当している川西地区自主防災会の最近の活動を紹介します。

祝三冠

川西地区自主防災会が
「第 18 回 防災まちづくり大賞」（主催：消防庁）
選定委員特別賞を受賞！！

平成 18 年度（第 11 回）に消防科学総合センター理事長賞、
平成 21 年度（第 14 回）に総務大臣賞に続く**三度目**の受賞となります。

大型発電機の格納庫、完成！

平成 25 年 7 月に大型発電機購入、その後、ブルーシートにかけてコミュニティセンターの駐車場に置かれたままになっておりましたが、昨年末に立派な格納庫が完成しました。

格納庫の基本条件は、約 850kg の発電機を天井から吊るしてトラックの荷台に乗せるだけの耐荷重能力を建築本体に持たせること。

この結果、骨組みは鉄骨として、荷重計算を行ないながら、設計から施工までを、コミュニティセンター職員の高橋氏（事務責任者）によって行なわれました。

鉄骨の裁断から溶接作業までコツコツと自宅の倉庫で実施して、12 月 23 日に棟上式を行ないました。過去に土器川が氾濫して 40cm まで浸ったことから発電機は約 60cm の高さで保管しています。

編集後記

今月の防災減災の輪は、香川大学工学部　長谷川教授より原稿をお寄せいただきました。誠にありがとうございました。